

# 藨冬紋枯病について

松岡正則\*

MATSUOKA, M. On the Winter Stem Rot of Rush plants.

## 緒言

藨は株分によつて苗を育成するが、1957年12月に、福岡農試筑後分場圃場に植付けた秋苗が、約10a倒伏した。病状は葉鞘においては、表面に灰緑色又は暗灰色の不正形の斑紋を生じ、その周縁は判然とした淡褐色をおびた病徴を呈し、地上茎においては、表面がや

第1表 病原菌菌叢の発育と温度との関係調査成績 (mm)

温度(°C)	培養第1日目	培養第2日目	培養第3日目	培養第4日目	培養第5日目
10	+	+	+	+	+
15		9.8	19.8	40.0	49.3
18		17.9	27.5	53.7	68.1
20	6.1	22.6	37.7	57.2	73.0
25	7.0	23.6	39.8	61.0	73.5
26~27	3.9	18.9	37.1	51.1	70.4
28	0.8	2.5	9.1	11.8	12.0
29	0.6	1.7	2.5	5.3	7.1
30	+	+	+	+	+

(註) +は菌糸が伸長しないが死滅してはいないものを示す。

第2表 発病の有無及び病徴

作物名	発病有無	病徴
稈麦	+	株腐病と同様の病徴を示す。
小麦	+	株腐病と同様の病徴を示す。
藨草	+	{地上茎の株元の健病両部の界が暗褐色となり、明瞭な斑紋を作り、その部分より倒伏

(註) +は発病を示す。

第3表 被害調査成績

品種名	健病有無	植付株 (株)	残存株 (株)	残存率 (%)	残存株莖数 (本)	対健苗莖数率 (%)
大莞3号	罹病株	66	2	0.93	53.0	31.3
	健全株	50	50	100	169.4	100
サザナミ	罹病株	126	51	40.7	73.3	45.7
	健全株	50	50	100	160.4	100

\*福岡県農業試験場

や褪色し、のち灰色の病斑となり、健病両部の界は暗黒色となつて、明瞭な病斑を形成し、折れ易くなり、それを株分け増殖したところ株切れとなる大被害を受けた。本病原菌を分離し、2, 3の試験をおこなつたので、概要をここに報告する。

### 病原菌菌叢の発育と温度との関係

1) 試験方法 2%蔗糖加用馬鈴薯煎汁寒天培養基に培養した本菌の4mm角に切つた菌叢を規定温度の定温器中にいれて培養し、菌叢の直径を測定した。なお1処理に3シャーレーを供試した。

2) 試験結果 第1表の通りである。

### 病原菌接種試験

1) 試験方法 2%蔗糖加用馬鈴薯煎汁寒天培養基上に培養した菌叢を寄主植物の株元につけ、そのまわりを脱脂綿で湿布して、20°C前後の接種箱中に入れて。なお接種後1週間目に病斑形成の有無を調査すると共に菌を再分離をおこない、接種菌と同一であることを確めた。

2) 供試作物名 稈麦(九州稈3号)、小麦(小麦農林61号)、藨草(大莞3号)。

3) 試験結果 第2表の通りである。

### 本病発病株増殖試験

1) 供試品種 大莞3号、サザナミ。

2) 試験方法 発病した株を抜取り、1株を約8株位に株分けして、無病畑苗床で移殖増殖させた。なお調査は残存株及び残存株莖数について9月1日に調査した。

3) 試験結果 第3表の通りである。

### 考察

本病原菌の発育最適温度は第1表の結果より、20~25°Cであり、最高温度は29°C位と考えられる。接種試験では麦類、藨草とも人工接種が可能であり、麦類では麦株腐

病と同様の病徴を呈し、発病時期は12~1月頃で、被害部よりの分離菌が *Rhizoctonia* であることより、鉗

方氏による，冬紋枯病と考えられる。又，温度試験，接種試験から麦株腐病菌 *Corticium gramineum* IKATA et MATSUURA であるように考察されるが，今後の試験結果によつて決定したい。本病発生圃場はマツバイ

の発生が多いところに発病が多い点から，圃場雑草及び肥料との関係があるように考えられるが，それらについて，今後研究を続けていく予定である。